

マルコ福音書には、目の見えない人が癒された話が2回出てきます。一つは本日の個所です。もう一つは10章です。そこではバルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていたのですが、ナザレのイエスが通りかかるところを耳にすると、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と大声で叫び始めたのでした（10章47節）。人々は彼を叱りつけて黙らせようとはしますが、彼はますます大声で叫び続けます。そして、遂にその声がイエスの耳に留まりました。「あの男を呼んで来なさい」。主のお声がかかると、彼は目が見えないにもかかわらず、躍り上がってイエスのもとにやって来たのです。これに対して、本日のテキストに出てくる盲人は対照的です。彼は、人々に連れられてやってきたのです。触れて欲しいと願ったのは、本人でなく、連れてきた人々です。この描写を見る限り、バルティマイのような熱意は感じられません。

このように、イエスのもとに来る人はさまざまです。ある人は自ら救いを求めてきます。また、ある人は他の人々に連れられてイエスのもとに来るのです。本人が切に求めているわけではないのかもしれない。このように、家族から誘われて教会に来る人がいるものです。友人に誘われて教会に足を踏み入れる人もいます。あるいは、キリスト教の学校で勧められて、あるいはレポートの課題を出されて教会に初めて来る学生も珍しくありません。

しかし、それはそれでいいのです。皆がバルティマイのようである必要はありません。本日のテキストに出てくるように自分の意志で教会に来ていなくてもいいのです。大事なことは、本人の熱意があるうがなかるうが、とにかくイエスのもとに来ていいということです。礼拝をしているということとは、神とイエスの前にいるということ事実です。このように、私たちにとって重要なことは、礼拝堂において、主を礼拝しているという事実なのです。そこで既に決定的に重要なことが始まっているのです。後はイエスがなさることです。目が見えるようになるならば、それはイエスの御業です。まず、イエスはこの盲人の手を取って村の外へ連れ出します。そして、その目に唾をつけ、両手をその人のその人の上に置いて、「何か見えるか」と尋ねられます。唾が癒しの為に利くとは思えません。しかし、分かっていることは、イエスがこの人の目を見るようにしようとしておられるということです。この人も、何かわからないけれども、とにかく一生懸命に塗ってくれている。実はイエスの唾だったのですが、薬かもしれないと思っただけかもしれません。とにかく、目を開こうとしておられる。そのイエスの熱意だけは分かっていたに違いないのです。そのことを私たちは知らなくてはならない。見るようになりたいと思う以前に、イエスが見えるようにしようと願っておられるのです。一時的なものではなく、その人にとって本当に価値のあること、生きる上で大切なものを与えようとしておられる。いわゆる、真実な生き方が出来るようにと願っておられる。つまり、その人にとっての真理がイエスによってもたらされたのです。

しかも、本日のテキストではイエスは繰り返し手を置かれている。すると、更によく見えるようになったのです。「すると、盲人は見えるようになって、言った。『人が見えます。木のようですが、歩いているのが分かります』。そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになった」（24〜25節）のでした。

イエス・キリストは聖書の中だけで癒しの業をしているわけではありません。私たちが見えるようになるために、その御体をもって触れてくださるのです。教会はキリストの体であると聖書は教えています。イエス・キリストは教会という体を通して私たちに触れて下さいます。イエス・キリストは教会が行う洗礼を通して触れてくださいます。聖餐のパンと杯を通して触れてくださいます。また、御言葉の説教を通して触れて下さいます。教会が共に祈り、礼拝をなさげることにおいて、また互いに愛し合い仕え合う交わりにおいて、イエス・キリストは私たちに触れてくださっているのです。私たちが真実なる生き方ができるようにと繰り返し触れてくださるのです。

吉野源三郎さんの「君たちはどう生きるか」の中で、コペル君は友人の水谷君のお姉さんのかつ子さんからナポレオンの話を聞かされます。どんな困難や苦しみも乗り越える英雄的精神が素晴らしいとかつさんは主張します。その言説にコペル君は感心します。敵に攻め込まれて、苦戦を強いられるなか、ナポレオンは敵のコサック兵の戦いぶりに感服し、見とれていたというエピソードを紹介しながら、かつさんは言います。「考えてごらんささい、戦争よ。負けたら、命が危ない場合よ。その中で、敵の戦いっぷりをほめるなんて、敵の勇敢さにみとれるなんて、実際、立派だわ」。コペル君たちは、かつさんの弁舌に圧倒されます。そんなコペル君たちに、かつさんはさらに続けて言います。「人間が、ある場合には、どんなに怖いことも、苦しいことも、勇ましく乗り越えてゆけるもんだと思うと、あたし、なんともいえない感じがするわ。自分から、苦しいことや辛いことに飛び込んでいって、それを突き抜けてゆくことに喜びを感じるなんて、本当にすばらしいことだと思わない？ 苦しみが大きければ大きいほど、それを乗り越えてゆく喜びも大きい。だから、もう死ぬことも恐ろしくないのよ。あたし、それが英雄的精神というものだと思うわ。こういう精神に貫かれて死んでゆく方が、のらくらと生きているより、ずっと立派なことだ。負けたって、こういう精神に貫かれていけば、負けじゃあないわ」。かつさんは、さらに勢いをつけて、ナポレオンが疲れ切った兵隊をかき集めて最後の一戦に臨んだ話や、結局、その戦いに負けて捕えられ、島流しにされたという話をしていきます。けれども、コペル君の叔父さんはそれに否を唱えます。ナポレオンは食料がなく、寒さで疲れ切っている兵隊を、勝ち目のないロシアとの戦争に向かわせました。兵隊のことを大切に思っていたわけではないのです。もちろん、強い意志や勇気をもって行動することは大事かもしれませんが、勝算のない戦いに人間を巻き込み、結果として多くの兵士を飢え死にさせたナポレオンが果たして立派な指導者なのか。ナポレオンは勇敢な戦争指導者だったかもしれないが、考えや思慮が足りない部分があった。ナポレオンは「苦戦を覚悟で出かけていった」とか、英雄的精神があれば「惜しい命さえ惜しくなくなってしまう」。そのようにかつさんが言うのは、1930年代の日本が戦争に突入しようとしていたからです。もし戦争になったら、負けそうな局面でも命がけで国のために戦え、みたいな当時の軍事教育的な言説を代表しているのです。コサック兵は勇敢に戦った、と書かれています。一方のナポレオン軍はどうだったのか。ナポレオン軍の兵士は彼が征服した国々から集めた外国人混成部隊でした。六十万もの人間がはるばるロシアまで出かけて行って、氷や雪の中で、ほとんど全部惨めな死に方をしてしまったのです。この兵士たちは、ヨーロッパの各地から集められた兵隊たちで、何も自分たちの国のためにロシアまで出かけていったわけではなかったのです。彼らは祖国の名誉のために戦ったのでもなければ、自分たちの信仰や主義主張のために戦ったのでもない。命にかけて守らなければならぬものは何ひとつなく、ただナポレオンの権勢に引きずられてロシアまで出かけ、その野心の犠牲となって、空しく死んでいったのです。

コペル君の叔父さんは、偉人とか英雄とか言われる人々は、みんな非凡な人たちであることは認めます。しかし、一応はその人々に頭を下げたうえで、彼らがその非凡な能力を使って、いったい何の役に立っているのかと、大胆に質問してみなければならぬと指摘します。非凡な能力で非凡な悪事をなすとげるといふことも、あり得ないことではないのです。叔父さんは、ナポレオンの勇氣、決断力、意志の強さなどには学ぶものがあるが、それらの力によって行ったことで、人類の歴史に役立ったことは何かを問わなければいけなと言っています。ナポレオンの場合、皇帝になるまでの間、封建制度を倒して自由な世の中を作ろうとしたことは役立ったけれども、その後、皇帝になつてからは権力のための権力をふるい、人々にとつては迷惑な存在になつてしまった。どんな偉人、英雄と言われる人でも、人間をどのように生かしたのかということが問われなければならぬ。ということです。イエスのように人を生かすために行動することこそが真理を人間にもたらすので